

フランス留学を経験して

人間文化創成科学研究科 理学専攻
工藤まゆみ

私は、博士後期課程二年生のとき、ボルドーにある「ヨーロッパ化学生物学研究所(IECB)」に一年間留学しました。ボルドーは、南フランスに位置し、乾燥したさわやかな気候が特徴です。そのため、ブドウが良く育ち、ワインが有名であるほか、ガロン川を中心とした美しい街全体の景観が世界遺産にも登録されています。

留学先であるヨーロッパ化学生物学研究所は、ボルドー大学の緑豊かな敷地内にあり、世界中からトップレベルの研究者が集まるヨーロッパの中心的な研究所の一つです。私はこの研究所で、Ivan Huc 先生の研究室に所属し、「らせん構造を有するフォルダマーの創製および構造解析」の研究をおこないました。Huc 先生は、フォルダマーの研究において世界的に注目されている若手研究者であり、また大変教育熱心であることから、私は丁寧な指導を受け、多くのことを学ぶことができました。Huc 研究室には、私のほかアジアやヨーロッパからの留学生や博士研究員が数多く所属しており、国際色豊かで自由な雰囲気がありました。日々の会話やディスカッションは全て英語で行われており、三週間に一度担当が回ってくる研究報告会では、英語によるプレゼンテーション形式でのディスカッションを経験しました。

Huc 先生の口癖は、「Save your time.」であり、この考え方は研究室のみならずフランス全体において共有されているように感じました。研究室の朝は早く、帰るのも早い、しかし仕事の効率は非常に高いものでした。朝研究室に来ると、はじめに一日の研究内容を素早く確認し、装置の予約や準備を済ませて実験に取り掛かります。実験中は話しかけられないほど皆集中しており、日中デスクワークをする人はほとんどいません。しかし、夕方六時くらいになるとさっさと実験を切り上げて、皆すぐ家に帰ってしまいます。日本とは異なり、オンとオフの切り替えがはっきりしていることと、家族と過ごすプライベートの時間を大切にしている点はフランスの特徴といえます。私もこのような生活リズムの中、短時間でより多くの研究成果を残すよう努力しました。

オンとオフのメリハリのあるフランスですが、オフの時は日本人にとって不便なことも少なくありません。フランスのお店が閉まるのは早く、休日はほとんどどこもお休みです。夏休みバカンスともなると、国のあらゆる機関が停止し、実験に必要な試薬が買えないほか、私の滞在許可書の申請にかかる手続きも止まってしまいました。しかし、休む時はしっかり休み、おもいっきりバカンスを楽しむというのは、オンのときの活力にもつながって良い習慣のように思いました。私も休日は、ボルドー近郊に広がるワイン畑を訪れたり、フランス各地を旅行したりして、その土地その土地の美味しい料理や文化を堪能しました。

フランスで生活をするにあたり、フランス政府給費留学制度、および湯浅年子記念特別研究員奨学基金制度による資金援助は大変ありがたいものでした。フランス政府給費留学制度を利用することで、フランスと日本の往復にかかる渡航費のほか、滞在中は現地の保険料や、医療費も全て国が負担してくれます。また、フランス政府給費留学生は、生活費として月およそ 770 €、住宅補助として月およそ 140 € (家賃に応じて異なる) 支給され、さらに研究にかかる費用 (パソコンや書籍の購入費等) としておよそ 900 € の補助が受けられます。また、フランス語などを学ぶ場合は、上限つきでその授業料の負担もしてくれます。フランスにはこの他、国内在住の全ての学生を対象とした CAF という組織による住宅補助があり、滞在許可証が発行されたのちに申請することで、家賃の 30-50% (収入に応じて異なる) が返金されます。一方で、湯浅年子記念特別研究員奨学基金制度からは、30 万円もの貴重な援助を賜りました。このような数々の支援を受けることによって、充実した留学生活を送ることができたと実感しています。留学の機会を与えて下さいました坂井光夫先生、永野肇先生をはじめとする関係者の皆様、および日仏理工科会に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。